

# あすなる分教室

## 「重度重複障がいの児童生徒の発達に応じた授業づくり ～認知・コミュニケーションの発達に着目して～」

### 1 テーマ設定の理由

あすなる分教室には、登校可能な児童生徒と常時医療的ケアを要するためベッドサイドで学習する児童生徒が在籍しており、体の動きや認知、コミュニケーションにおいては多様な実態を呈している。そのため、職員間での情報共有や共通理解を図るためには、共通した視点で、より細やかな実態把握をする重要性や発達を意識した研修・研究のニーズが挙げられた。

そこで、あすなる分教室の学部経営及び重点である「コミュニケーション能力の向上」を目指して、コミュニケーション及びその基礎となる認知の発達に着目した実態把握の方法や実態把握に基づいた授業づくりについての研究に取り組むこととした。

### 2 研究方針

(1) 1年次は、全職員で取り組む学習会（コミュニケーションの発達やあすなる分教室の児童生徒におけるコミュニケーション能力についての討議等）を中心に行う。

さらに、学校で保有している既存の発達検査（遠城寺式乳幼児分析的発達検査、MEPA-ⅡR等）や広島県福山支援学校を始めとする先行研究で使われているチェックリスト等を体験し、諸検査・チェックリスト等の短所・長所について意見を出し合いながら、あすなる分教室で活用する検査・チェックリストの方向性を導く。

(2) 2年次は、分教室の児童生徒に最も活用可能な発達検査として選択した「広島県立福山特別支援学校作成の重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト」についての学習を深め、児童生徒の実態把握と評価を行う。その上で課題となる項目に着目した授業実践および事例報告・検討会をおこない授業改善につなげる。また小学生から70代の児童生徒を対象としている分教室ならではのコミュニケーションや表出の捉え方、高齢者を対象とした検査結果の数値の分析等について、学部全体で共通理解を図る。

### 3 研究経過・内容

月 日	内 容
H30 6月11日(月)	・研究テーマと推進計画の確認 ・あすなる分教室の児童生徒のコミュニケーションについてのグループワーク
7月11日(水)	・発達に関する文献の紹介 ・あすなる分教室の児童生徒の発達についてのグループワーク
9月18日(火)	・遠城寺式乳幼児分析的発達検査、MEPA-ⅡR、S-M 社会生活能力検査の体験
10月25日(木)	・学習習得状況把握表の体験
11月13日(火)	・「重度障害児のコミュニケーション発達評価シート」、「重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト」の体験
12月13日(木)	・体験した6つの諸検査・チェックリストについての振り返り ・次年度活用する諸検査・アセスメントについてのグループワーク
H31 4月24日(水)	・テーマと推進計画の確認 ・チェックリストの特徴についての説明、意見交換
5月13日(月)	・チェックリストの手順、評価基準等の確認

5月16日(木)～ 6月14日(金)	・児童生徒18名のチェックリストを全職員で評価
6月19日(水)	・チェックリストを使った評価についての感想、課題等を意見交換 ・事例報告・検討会
7月9日(木)	・事例報告・検討会
9月10日(火)	・事例報告・検討会
10月16日(水)	・事例報告・検討会
11月12日(火)	・事例報告・検討会
12月16日(月)	・まとめ
12月19日(木)	・まとめ
1月21日(火)	・まとめ
2月18日(火)	・次年度に向けて

#### 4 1年次の研究実践

##### (1) 学習会について

ア あすなる分教室の児童生徒（重度重複障がい児・者）のコミュニケーションについて\*6月実施

上記のテーマについて付箋に職員の意見や意識していること等を記入し、それらをもとに、ベッドサイド学習を担当している職員と登校可能な生徒を担当している中学部・高等部の職員で話し合い、キーワードや課題を整理し、発表した。



イ コミュニケーションについて \*7月実施

6月の学習会で2つのグループで共通して挙げられた「①コミュニケーションについての実態把握の方法」、「②表出をどのように捉えるか」、「③職員間の共通理解」といったキーワードにかかわって、「障がいの重い子供のコミュニケーション指導（小池俊英著）」、「障害の重い子どものコミュニケーション評価と目標設定（坂口しおり著）」、「自立活動ハンドブック（広島県立福山特別支援学校著）」の文献からコミュニケーションの基となる認知、刺激や働き掛けの受け止め（受容）の発達、前言語期における表出の発達にかかわる部分について紹介した。その後、あすなる分教室の児童生徒についての「コミュニケーションの基となる認知」、「受容」、「表出」のどの発達段階であるかを把握するワークを行った。その結果、改めて、あすなる分教室の児童生徒の実態は幅広いことを確認できた。職員同士が日々の児童生徒の姿を振り返りながら、どの発達段階にあるのかを活発に話し合うことができた。



(2) 諸検査・チェックリストの体験について \*9～11月実施

以下の6つの諸検査・チェックリストを小学部1年、中学部3年、高等部1年、高等部2年から対象児童生徒を1名抽出し、その児童生徒を主に担当している職員2～3名のグループで体験した。

諸検査 チェックリスト名 (编者)	特 徴	経験のある 職員数 (9人中)
遠城寺式乳幼児分析的発達検査 (遠城寺宗徳、九州大学小児科)	適応年齢0歳から4歳7ヶ月。検査項目は、移動運動、手の運動、基本的習慣、対人関係、発語、言語理解の6領域の発達の状況を分析的に評価でき、検査しやすい問題が選ばれていて、簡便で時間がかからない。	3名

MEPA-II R (小林芳文、藤村元邦、飯村敦子他)	重症児(者)、重度重複障がい児の全体的な発達の「広がり」と流れ」を把握し、ムーブメント教育・療育法のプログラム作成と支援の手掛かりを得るアセスメントである。0ヶ月～18ヶ月の発達レベルを5つのステップに分け、運動・感覚(姿勢、移動、操作)とコミュニケーションという2つの機能分野(領域)で構成。	5名 *MEPAも含む
S-M 社会生活能力検査 (上野一彦、名越斉子、旭出学園研究所)	質問項目は発達年齢段階ごとに分かれていて、身辺自立、移動、作業、コミュニケーション、集団参加、自己統制の6つの領域から129項目で構成されている。回答結果をもとに社会生活年齢(SA)と社会生活指数(SQ)が算出できる。	8名
学習習得状況把握表(小池敏英)	児童生徒の視覚・聴覚に関する基礎情報とコミュニケーション学習(視覚認知、聴覚認知、意思伝達)について把握する。学習把握表というソフトの項目に沿って回答していくと指導課題がパソコン上に提案される。	0名
重度障害児のコミュニケーション発達評価シート(坂口しおり)	言語指導担当者としての経験と、文献研究を基に作成された。6つの視点(志向、理解、表出、学習基礎、主な認知発達、好む遊び)でコミュニケーションを評価する。	1名 *研修のみ
重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト(広島県立福山特別支援学校)	コミュニケーションに関する力(人間関係、要求表出)の発達と、コミュニケーションに関する力の基礎となる認知力(聴覚・言語、言語理解、言語表出、触覚、視覚等)の24ヶ月未満の発達に焦点を当てた項目が充実している。重度の知的障がい、視覚障がい、肢体不自由による制限があっても評価しやすい項目を重視している。	0名

(3) 次年度あすなろ分教室で活用する検査・チェックリストについて \*12月実施

9月から11月までに実施した6つの諸検査・チェックリストについて、個人で振り返った後、小学部、中学部、高等部の各グループで意見交換をし、活用可能な諸検査・チェックリストを1つに絞り発表した。その結果、どのグループでも候補として挙げた「重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト」を活用して、次年度の授業研究を実施する方向で決まった。

各グループが選んだ諸検査・チェックリストとその理由を以下に記す。

学部	小学部	中学部	高等部
諸検査 チェック リスト名	重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト	①重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト or ②重度障害児のコミュニケーション発達評価シート	重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト
理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・検査項目の細やかさ</li> <li>・評価から指導目標が導かれるから。</li> <li>・手引きがあり参考になる。</li> <li>・全ページをすると大変なのでコミュニケーション(要求表出・人間関係)のみを活用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①・項目が細かい。</li> <li>・段階がある。</li> <li>・評価からの指導の手引きや教材教具につながる。</li> <li>②・芽生え的反応がある。</li> <li>・記録を継続して取れる。</li> <li>・コミュニケーションの領域に特化している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・取りかかりやすい。</li> <li>・チェックしやすい。</li> <li>・個別の支援・指導に直結している。</li> <li>・項目が取り組み易い。</li> </ul>

## 5 1年次の成果と課題

### (1) 成果

〈発達検査の研修・体験について〉

○様々な発達検査について知ることができ、それらを比較検討できた。

〈発達検査(実態把握)の重要性について〉

○重度重複児童生徒に適した発達検査を知ることと、検査により実態把握を行うことの重要性をあらためて感じた。

〈複数の視点でみることについて〉

○複数の職員で話し合うことで、違った角度(視点)から実態把握ができ、児童生徒の新たな一面を知ることができた。

○アセスメントや評価は、見る人の主観が入りやすいため複数でみることで良かった。

〈研究の在り方について〉

○コミュニケーションの学習会により、あすなろの児童生徒のコミュニケーションについての意見交換ができた。

○グループワークにより、話し合いを活発にすることができた。

○どの発達検査を行えば良いか、活用可能な検査を学部で共通の結論が出せた。

### (2) 課題

〈発達検査の取り組みについて〉

○一つの検査にじっくり取り組んでいないので、まずは選択した検査への取り組みが必要である。

○重度重複児童生徒の検査には、ある程度の関係性が構築できていることが必要と思われ、担任が替わったら引き継ぎが必要である。

○あすなろの場合高齢の方もいるため、生活年齢と検査年齢とのギャップをどう考えたら良いか、考える必要がある。

○課題について職員間での共通理解が必要である。

## 6 2年次の研究実践

### (1) アセスメントチェックリストによる実態把握(別紙1)

広島県立福山特別支援学校作成の重度・重複障害児のアセスメントチェックリストを使用し全児童生徒の実態把握を実施した。チェック内容は、認知・コミュニケーションの分野と基本的な健康・身体の動き等についての分野から成り、発達段階の項目に沿って担任が評価し、その後全職員で検討を重ね共通理解を図った。実施に当たっては、長期にわたり入院生活を送っている状況や幅広い年齢層で構成されている分教室の実態を踏まえ、以下の点を確認して進めた。

・学校で観察できていない姿については評価せず空欄とする。

・過去にできたことがある、あるいは「できていたようだ」という不確定な要素は排除する。

・試したことのない項目については空欄とし、今後の授業の中で様子観察をしながら、数ヶ月後に再評価をする。

・機能的に難しい項目を除いて「おおよそできる」または「できる」で○が付いた数が半数以上であれば、そのキーワードの領域はほぼ達成しているとみなす。

### (2) 事例報告・検討会の実施

アセスメントを受け、授業をどのように改善しようとしたのか、事例報告・検討会という形式で共通理解を図った。事例報告の項目として、以下の点を挙げ意見交換を行った。(別紙3)

・児童生徒の各領域の発達段階(別紙2)

・教師の願い

・課題とする項目

・学習内容(課題に向けて取り入れた内容)、支援、留意点

- ・ 学習の様子
- ・ 課題

## 7 2年次の成果と課題

### (1) 成果

- ① 様々な発達検査を体験した上で、分教室の児童生徒により適したアセスメントチェックリストを選択することができた。
- ② 児童生徒全員の実態について、職員全員で共通理解を図ることができた。特にベッドサイド学習の様子や普段関わりの薄い子ども達の実態を知ることができた。
- ③ 発達段階に沿った細かい視点で、一人一人の実態を振り返りながら、生活レベルの実態に気付くことができた。
- ④ 複数の目で一人一人の様子を捉え直したことで、自分には見えなかった子どもの姿を知ることができたり、捉え方の違いに気付くなど、今後の関わり方への参考となった。
- ⑤ 発達を意識した共通の観点で情報交換を行い、アセスメントチェックリストの項目の中から、課題となり得る項目を「個別の指導計画」の中に生かし、日々の授業を通して課題解決に向けて取り組むことができた。
- ⑥ 事例報告を通して、授業の手立てや支援、教材教具の工夫等について意見交換をし、授業改善につなげることができた。

### (2) 課題

- ① 複数の職員で評価し、情報を共有する作業を継続していくための方法を構築すること。
- ② これまでのチェックリストの結果と病状や生活歴などを踏まえて、個別指導の充実が求められる。

## 8 参考文献

「重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト～認知・コミュニケーションを中心に～」ver5 平成30年3月発行 広島県立福山特別支援学校

### 別紙1 アセスメントチェックリスト（高等部生徒A）

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	
1. 何らかの異常がある。																										
2. 何らかの異常がある。																										
3. 何らかの異常がある。																										
4. 何らかの異常がある。																										
5. 何らかの異常がある。																										
6. 何らかの異常がある。																										
7. 何らかの異常がある。																										
8. 何らかの異常がある。																										
9. 何らかの異常がある。																										
10. 何らかの異常がある。																										
11. 何らかの異常がある。																										
12. 何らかの異常がある。																										
13. 何らかの異常がある。																										
14. 何らかの異常がある。																										
15. 何らかの異常がある。																										
16. 何らかの異常がある。																										
17. 何らかの異常がある。																										
18. 何らかの異常がある。																										
19. 何らかの異常がある。																										
20. 何らかの異常がある。																										
21. 何らかの異常がある。																										
22. 何らかの異常がある。																										
23. 何らかの異常がある。																										
24. 何らかの異常がある。																										
25. 何らかの異常がある。																										
26. 何らかの異常がある。																										
27. 何らかの異常がある。																										
28. 何らかの異常がある。																										
29. 何らかの異常がある。																										
30. 何らかの異常がある。																										
31. 何らかの異常がある。																										
32. 何らかの異常がある。																										
33. 何らかの異常がある。																										
34. 何らかの異常がある。																										
35. 何らかの異常がある。																										
36. 何らかの異常がある。																										



## 6 学習の様子

日によって様々な表情を見せる。学習中は音の出る教具に笑顔になったり、絵本を読んでもらっていると安心した表情を浮かべることが多い。しかし、楽しそうにしているも、興味が無くなったり、集中が途切れたりすると指を咥えたり、指を咥えたまま眠りそうになることもある。

## 7 課題

問い掛けに対して言葉の理解が十分にあるとは言えない。学習を終えた教具を見える位置に置くなど、その方向を注視するような手だてを考えたい。

## 8 情報交換

### ① 実態の捉え方について

- ・音や人の気配に対しての反応であり、「見えている」という捉え方は難しいのではないかな。
- ・左手で物を握るのが上手である。
- ・「Aさん」と呼び掛けるときに眉間やほっぺたを触ると表情が変わる。
- ・呼名に対して「は」「あ」という発声が聞かれるときがある。
- ・人の声を聞いて反応するので、「聞いているな」という捉えはできる。全く脈絡のない反応（発声）ではない。
- ・自分の名前への意識はある。
- ・不快なときは泣く。（姿勢、オムツ、暑い）

### ② 今後の関わり方について

- ・声掛けをしながら、繰り返すことが大事である。積み重ねることが大切である。
- ・「終わり」「おしまい」は分かるが、「もう1回」は高度である。
- ・授業のパターンをつくることで、本人なりの見通しがもてるかもしれない。  
パターン化→反応を確認→言葉で返す
- ・意思表示をしたことに対する教師側の返し方が重要である。  
褒めながら返してあげる。「楽しかったんだね」「気持ち悪かったんだね」  
泣く、笑う、発声等に対してのやりとりを大事にする。